

吉野川歴史探訪 吉野川下流の内水対策について

～その2 飯尾川河川改修のはじまり～

こんにちは。別宮川三郎です。まもなく出水期を迎えるにあたり、四国地方整備局の事務所では、洪水対応演習、重要水防箇所の手点検、排水ポンプ車の操作訓練、水防技術講習会などの取り組みが進められています。これらの取り組みは、洪水や水害に対して迅速かつ確実に対応するために欠かせない必要な準備となります。緊張感をもって取り組みたいと思います。

さて、前回より吉野川下流の内水対策について探訪しています。前は、吉野川市を流れる桑村川・学島川について探訪しましたが、今回は、明治末期から昭和初期に行われた堤防整備により、徳島県下最大の内水河川となった飯尾川における河川改修のはじまりについて、探訪したいと思います。

1. 徳島県下最大の内水河川、飯尾川

飯尾川は、吉野川市鴨島町の樋山地に源を発し、北流して平地に達した後、流路を東に向け平地を緩やかに蛇行しながら徳島平野の南縁に沿って、途中三谷川、寺谷川、渡内川、逆瀬川等の支川を合わせ鮎喰川に合流する幹川流路延長 25.8km、流域面積 71.2km² の一級河川です。(図 1)

その流域は、徳島県北東部に位置し、吉野川市川島町、同市鴨島町、名西郡石井町、徳島市西部に及んでいます。流域の地形は、流域の7割程度を占める平地のそのほとんどが吉野川の「氾濫原性低地」を主体とした沖積低地であり、流域南部は山地と丘陵地からなっています。(図 2)

飯尾川は、吉野川とほぼ並行に流れ、河床勾配は非常に緩やかで、流路のほとんどが低平地を緩流しています。そのため、吉野川の洪水の影響によって飯尾川の洪水が排水されない区間では、住宅地や道路の浸水を繰り返してきた、「県内最大の内水河川」なのです。

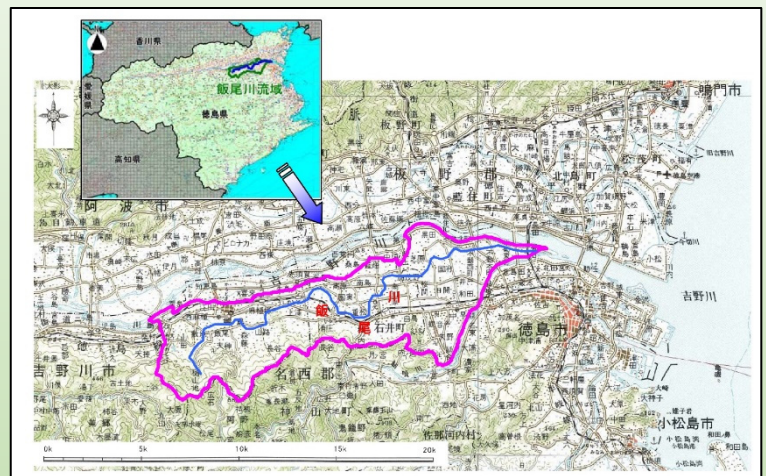


図 1. 飯尾川位置図

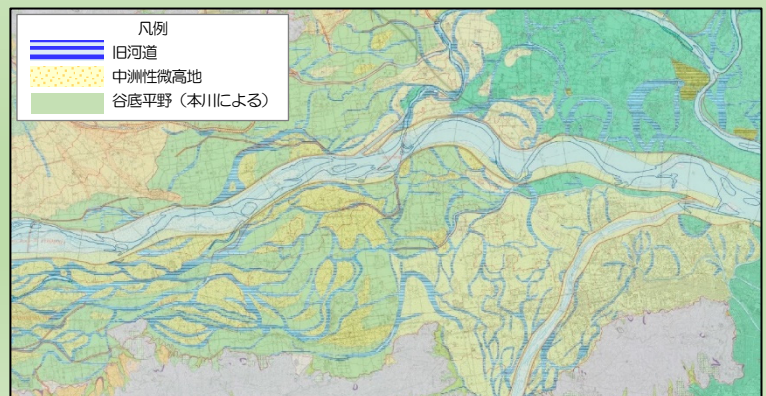


図 2. 吉野川流域水害地形分類図

2. 飯尾川における河川改修のはじまり

吉野川下流、徳島市以西の南岸地域の低地は、かつて、吉野川の洪水氾濫により一大湖水となる水害の常襲地でしたが、明治末期から昭和初期に行われた国による堤防整備（吉野川第一期改修事業）により、沿川町村の多くは、漸く本川からの浸水被害を免れることができました。飯尾川に関連する吉野川右岸堤防も、大正の初めの頃より築堤に着手していました。それまで飯尾川の河川改修は手つかずの状況でしたが、吉野川からの氾濫防止に目途が立ったことから、漸く飯尾川流域の調査、改修計画の検討など「飯尾川排水改良実査」が開始されたことが、大正2年の新聞記事で確認することができます。（資料1）



資料 1. 飯尾川排水改良実査の開始を伝える記事
（徳島毎日新聞 大正2年6月7日）

しかし、昭和に入っても工事着手には至りませんでした。現地を視察した関係者は、吉野川の堤防整備により、結果的に飯尾川の排水に影響が出ていることは事実であり、吉野川の合流点に建設された排水閘門（現在の飯尾川第一樋門）は、飯尾川の洪水排除には狭少の感があるので、何とかして鮎喰川へ排水することができれば、氾濫水の停滞緩和ができると考え、早期解決を望んでいたことが、当時の新聞記事に記されています。

このように、飯尾川沿川の低地では、吉野川堤防が完成した後も、本川の水位上昇に起因した支川氾濫（内水氾濫）に悩まされていましたが、昭和7年になり、徳島県内の中小河川ではいち早く、中小河川改修事業として着手することになりました。



3. 飯尾川第一期改修

(1) 新川を開削し合流点を鮎喰川へ延伸、下流 8.6km を改修

第一期改修前の飯尾川は、吉野川南岸の氾濫域を蛇行貫流する緩流河川で、高崎村付近の吉野川へ合流していました。飯尾川は、かつての吉野川本流であった古い河道であり、流路の殆どが平地であるため、古くから洪水時には氾濫を繰り返し、人家、農作物に多大な被害を与えてきました。

昭和7年から始まった飯尾川第一期改修では、従来、飯尾川の洪水は吉野川第一期改修工事で設置された第1樋門だけで吉野川に排水されていたのを、約1.7km下流の浜高房まで新川を開削(写真1)し、第2樋門(写真2)を設けて鮎喰川に合流させたのです。



写真 1. 飯尾川第 1 樋門下流の新川開削河道



写真 2. 旧飯尾川第 2 樋門
(平成 23 年に改築)

また、第 2 樋門から上流、石井町高川原までの 8.6km 区間は、計画流量 500 個 (139m³/s) が流れるように新河道は 3~4 倍に広げられました。また、改修区間のうち高川原村加茂野から南井上村の西端に至る区間は、川の流れが屈曲(写真 3)していたことから、低湿地に新川を開削し、ショートカットを行いました。(図 3)



写真 3. 屈曲し狭隘な旧河道

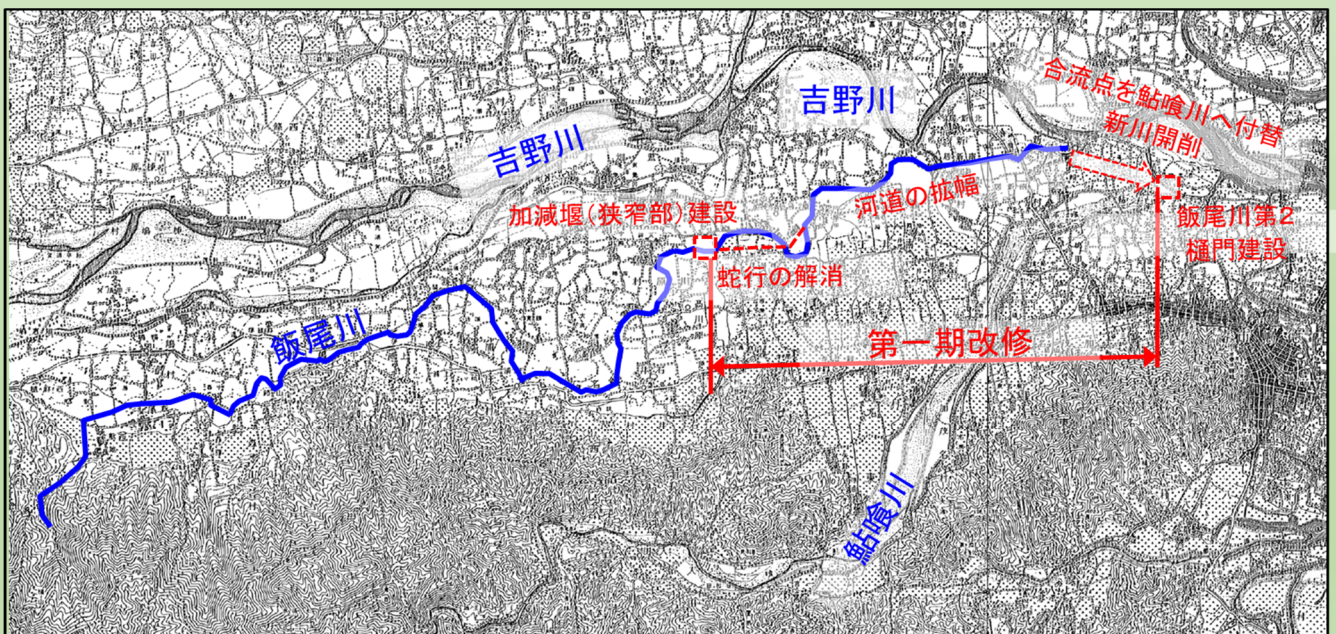


図 3. 改修前の飯尾川河道と第一期改修内容 (明治 29 年地形図に筆者追記)



(2)人工狭窄部「加減堰」の誕生

飯尾川改修工事は、県の担当者が竹やりをもった下流の住民に追いかけるという緊迫したものであったと伝えられています。それは、飯尾川の河道を広げると上流にたまっていた水が下流に急激に流れて洪水の恐れがあるという下流住民の強い反対のためでした。

工事の進捗に伴い、下流新居村では水害が吉野川第一期改修前よりも増加したことや、南井上村では上流改修(飯尾川改修第4工事)は、上流の氾濫水が直流し下流一帯で氾濫するため工事への反対陳情を行ったことが、昭和10年の徳島毎日新聞に記されています。このように、上下流対立を招くものとなったため、やむなく高川原村渡内川合流点の直下流の川幅を人工的に狭くし、下流に流れる水の量を調整(加減)するための狭窄水路である加減堰(写真4)を造りました。加減堰は全長100mに渡り護岸や河床に青石を張ったものでした。

この加減堰は、下流の洪水負担を少なくする反面、上流からの水の流れを阻害したことにより上流は大雨毎にあふれることになり、飯尾川の上下流問題の象徴として、後に飯尾川最大の懸案となったのでした。



▲写真 4-1
加減堰で狭窄している飯尾川



▶写真 4-2
加減堰下流端(平成24年)

飯尾川第1期改修事業は、昭和7年～昭和11年の約5年、事業費は約88百万円で完了しました。しかし、その後、20年余り、加減堰から上流は見るべき改修は行われず、関係住民は洪水の度に水害を受けていました。次回は昭和30年代半ばから再開された河川改修や加減堰のその後について探訪しましょう。

